Part 2

高校生の「学ぶ」はどう変わる？

新しい学び「探究」を通して自分のあり方を知る

今、高校の教育が大きく変わってきています。新しい学びを象徴するのが、「探究」と呼ばれる学び方です。探究とは何か、授業はどのように行われるのか、大学入試とも関係があるのか、保護者が気になるポイントについて解説します。

【記事監修者】
東京大学
大学総合教育研究センター
教授
佐藤浩章先生

北海道大学大学院教育学研究科・博士後期課程単位取得退学。博士（教育学）。愛媛大学准教授・大阪大学教授等を経て現職。ポートランド州立大学客員研究員、キングスカレッジロンドン客員研究フェロー等を歴任。専門は高等教育開発。『大学教員の能力開発研究』『高校教員のための探究学習入門』など著書多数。

正解のない課題に向き合い、答えを模索するのが「探究」

これまでの高校教育では、知識やスキルを身につけることが重視されてきましたが、今、そのあり方が大きく変わりつつあります。新しい教育では、知識やスキルの習得に加え、自分で考えて判断する、考えたことや思いを表現するといった、「身につけた知識やスキルを活用する力＝社会で広く役立つ力」や「学ぶ姿勢や意欲」を育むことに重きが置かれています（**図1**）。

また、学び方も保護者が高校生だったころから変化し、「主体的・対話的で深い学び」と呼ばれる学び方が目指されています（**図2**）。各教科・科目のカリキュラムや授業はこうした点から再構成され、先生の教科書の説明を聞き、知識を覚えて問題を解くだけではなく、より能動的な学びを求めるものになっています。

なかでも新しい学びを象徴するのが、「総合的な探究の時間」です。2022年度から始まった新課程では必修科目となっており、すべての高校生が履修します。「探究」とは、自ら課題を設定し、その課題について情報を集め、整理・分析し、課題の解決に努め、意見や考えをまとめ、表現するというプロジェクト型の学びのことです。このサイクルをくり返し、教科を横断して学びを深め、課題を発見し解決する資質・能力を身につけることが期待されています（**図3**）。

探究が必修になった背景には、社会の変化があります。変化が

図1 育成すべき資質・能力の3つの柱

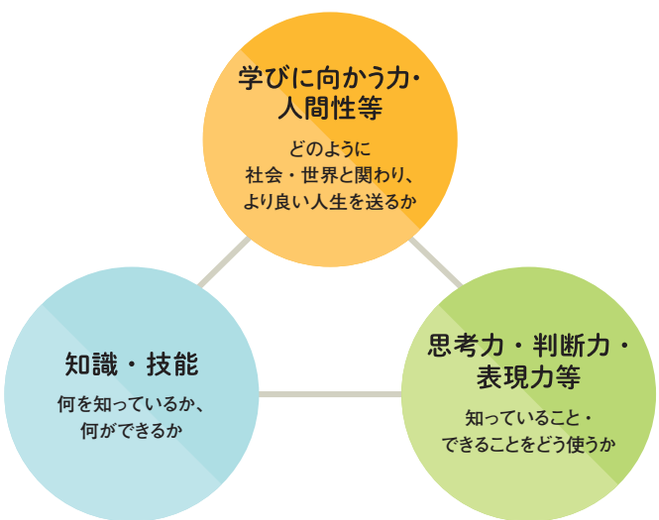


図2 主体的・対話的で深い学び

主体的な学び	● 学ぶことに興味や関心をもつ ● 自己のキャリア形成の方向性と関連づける ● 見通しをもって粘り強く取り組む ● 自己の学習活動を振り返って次につなげる
対話的な学び	● 生徒同士が協働する ● 教職員や地域の人と対話する ● 先哲の考え方を手掛かりに考える
深い学び	● 各教科などの特質に応じた「見方・考え方」を働かせる ● 知識を相互に関連づけてより深く理解する ● 情報を精査して考えを形成する ● 問題を見いだして解決策を考える ● 思いや考えを基に想像する

※図1～3は文部科学省「平成31年改訂高等学校学習指導要領」より作成。

取材・文／笹原風花

激しく、さまざまな情報や多様な価値観が渦巻く今の社会は、何が正しいのかを自分で判断して行動すること、新しい視点でものごとを見て変革を起こすことが求められます。自ら課題を見いだし解決するという探究は、変化の激しいこの時代を生き抜くうえで必要なスキルを身につけるための科目とも言えるでしょう。

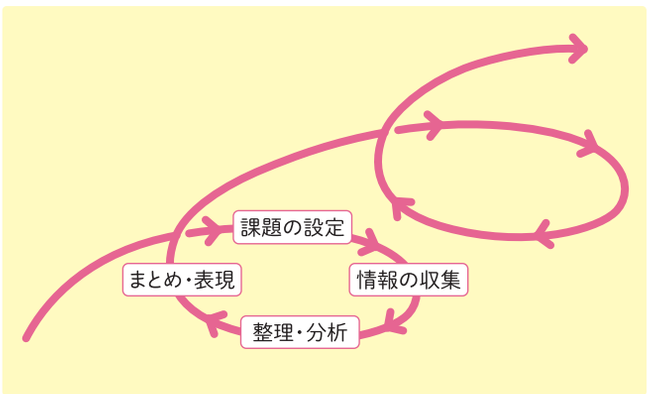
体験を通して学ぶ探究が、変化のきっかけになる

下のマンガにあるように、探究のサイクルは自分なりの課題を設定するところから始まります。課題についての情報収集では、インターネットや書籍といった資料からの情報だけでなく、実際に困っている人や専門家に話を聞きにいくフィールドワークを行う場合もあります。集めた情報を整理・分析したり人と意見を交わし合ったりしながら解決策を考え、行動につなげ、最後は資料にまとめてプレゼンテーションやポスターセッションを行います。なお、探究の進め方やテーマは学校や地域によってさまざまです。子どもがどのような探究を経験しているのか調べてみましょう。

探究に取り組むうえでポイントになるのが、自分ごととして課題に向き合えるかどうかです。日常生活や社会に目を向けたときに湧き上がってくる疑問や興味・関心に基づき、「(この課題を)なんとかしたい」という強い動機をもっている生徒は、積極的に探究に取り組みます。

私たちは取材を重ねるなかで、探究をきっかけに変化した生徒の姿を何度も見聞きしてきました。先生方からも、「それまであまり勉強に意欲的ではなかった生徒や勉強が苦

図3　探究のサイクル



←つづく

手な生徒が、探究を通して学ぶ楽しさや行動する面白さに気づき、変わっていった」「これまで見えなかった生徒の側面を、探究を通して知ることができた」「こちらが驚くほど成長する生徒がいる」という声をよく聞きます。このように、体験を通して学ぶ探究が、生徒にとって変化のきっかけになっています。

探究での経験や気づきが進路選択につながる

保護者として気になるのは、進路選択、特に大学受験との関係でしょう。探究は、自分の興味・関心を掘り下げる学びであると同時に、自分自身を掘り下げる学びでもあります。つまり、自分は何が好きか、何が得意か、どういう人間か、また、高校卒業後に何をしてどう生きていくのかという問いと、密接に結びついたものなのです。実際、探究をきっかけに、将来やりたいことや学びたいことが見えてきたという生徒は少なくありません。これから社会に出て人生の選択をしていく前に、探究によって自分のあり方を知ることはとても重要なのです。

探究の経験は、大学受験において、どの大学で何を学ぶかを決める際のきっかけや理由になり得ます。さらに近年は、総合型選抜や学校推薦型選抜という方式で大学を受験する高校生が増えています。これらの選抜方式では、いわゆる学力試験に加えて、高校での取組や大学での学びへの意欲が重視されます。つまり、探究を通して得た経験や学びが、大学受験時の評価に直接的に関わってくるのです。実際、高校で取り組んだ探究の成果を評価する入試を行う大学や、探究型入試を取り入れている大学も徐々に増えています（詳しくは本誌15ページの記事をご参照ください）。探究に熱心に取り組むことで、進路選択の幅を広げることができるのです。

このように変化した教育において、保護者として、できることは何でしょうか。探究の時間でどのような課題に取り組んだのか、何をしたのかということに加え、自分自身について何を考え、何を感じ、どんな気づきがあったのかを、お子さんに尋ねてみてください。子どもが何に興味・関心をもっているか、自分のことをどう分析しているかがわかると、将来の進路について対話しやすくなります。対話を通して、子どもが自分のあり方・生き方について考え、探究していくのを見守ってあげましょう。